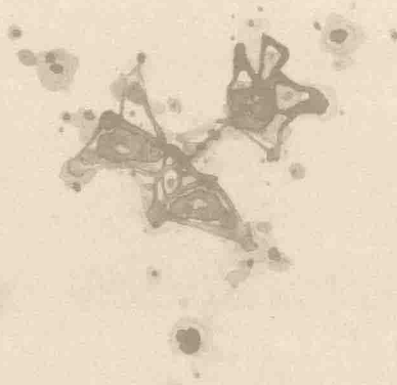


仮想の火

宮脇千鶴子歌集



炸叢書第七二篇

仮想の火

宮脇千鶴子歌集

現代短歌社

略歴

宮脇千鶴子（みやわき ちずこ）
昭和10年 長野県駒ヶ根市に生まれる
昭和49年 形成社入会
平成5年 炸短歌会入会（現在、編集委員）
平成5年 形成社解散
平成6年 波濤入会
平成23年 波濤退会

歌集 仮想の火

炸叢書第72篇

平成27年9月28日 発行

著 者 宮 脇 千 鶴 子

〒359-0024 埼玉県所沢市下安松526-3

発行人 道 具 武 志

印 刷 (株)キャップス

発行所 現 代 短 歌 社

〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-26

振替口座 00160-5-290969

電 話 03（5804）7100

定価2500円（本体2315円＋税）
ISBN978-4-86534-117-1 C0092 Y2315E

仮想の火
目次

はしがき

松坂
弘

二夏の過ぐ

一五

噴水

一八

秋から冬へ

二〇

喪の草履

二三

石の象

二五

実をふりこぼす

二六

蠟の灯ゆらぎ

三〇

オフェリアの髪

三三

冬日の中に

三五

まなこ開けり

三七

花祭

傷もかくまひ

月蝕

伝言のやうに

結球

音とも紛ふ

仮想の火

つつみて香れる

人の十指に

何も残さず

陶の薔薇

孔雀椿

黒のパラソル

拳をひらく

蒸気時計

三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

五感踊らせ	七
無数の中より	六
みなとみらい	八一
春の靴	八三
記念樹の梅	八五
この世の夏	八八
朱色に染むる	九〇
冬のさくら	九二
咀嚼の音	九四
市場と野鳥公園	九七
延命の器具	九九
一杓の水	一〇一
疏水をめぐる	一〇三
瘤もつ樹木	一〇六
不思議をいただき	一〇八

逆光の写真	一一一
摩周湖を訪ふ	一一三
漆の椀	一一五
遠き雲見る	一二七
助惣鱈	一二〇
堅香子	一二三
雨ふるたびに	一二五
石碑の面	一二七
秋天	一二九
朝の庭	一三三
菜園を舞ふ	一三四
交譲木あふぐ	一三六
絹の手ぶくろ	一三九
雪模様	一四一
唐津より	一四三

人參の花

一四

眠らぬ観覧車

一四

冬の窓辺

一五

プラスチックの雪掻き

一五

えごの花

一五

北あかり

一五

終章

一六

芯まで白し

一六

土の表

一六

祝電

一六

花も苦しみ

一七

夜に思ひみる

一七

植物園

一七

弓なりの坂

一八

つるし雛

一八

若苗	三三
打水	三三
花水木	三八
冬湖	二六
風と引きあふ	二三
冬立つ日	二〇
朝の俎上に	二七
一の字	二四
花桃	二二
春立つ水	一九
木守柿	一九
秋の音	九四
青柚子	一九
麒麟の首	一八
無数の斑	一六

三三	二六	二三	二〇	二七	二四	二二	一九	一九	九四	一九	一八	一六
三三	二六	二三	二〇	二七	二四	二二	一九	一九	九四	一九	一八	一六

星の斑	三六
穂麦	三九
淡彩	三三
音読	三五
名残	三八
深く思はず	四〇
散りまよひ	四三
弥勒の口元	四六
あとがき	四九

はしがき

このたび、宮脇千鶴子さんが第一歌集『仮想の火』を刊行することになりましたので、ひと言はなむけの言葉をお贈りします。

宮脇さんはわたしと同郷の長野県のご出身です。しかし、長野県はご存じのように南北に長い県で、北（北信）は新潟県に接し、南（南信）は静岡県と愛知県に接しています。同じ県であっても自然のたたずまいも、生活の習慣もかなり異なっています。

宮脇さんは南信の伊那谷生まれ育ちで、天竜川の滔々とした流れをひとつの拠り所や中心としていて、その向うには何かが開けている、といった先行き感や展望の感があつて、わたしの北信とは違った明るさが思考の根底にあるように感じられます。

宮脇さんとの出会いはどういう契機によるものか思い出せませんが、私を中心とする短歌の会に出席されるようになったのは会員名簿によると平成五年の五月との記録があります。

私どもの短歌会は、少人数のグループ研究を原則とし、丁寧な解釈、感想、批評を旨としております。宮脇さんはグループの一つ「鶴群の会」に所属され殆ど欠席されることもなく熱心に作歌をつづけ約二十年経過しました。宮脇さんはそれを一区切りと考えて歌集の出版を思いたれたと承知しています。たいへん時宜に適っていると思います。

喪の草履かがみて履くに母に似る外反拇趾のあざやかに出づ

白骨を拾ひゐる間も容赦なく病む右の眼の蚊は飛びてをり

左手と右手が相呼ぶ形して手袋が道に落ちてゐたりき

仮想なる火を見つめつつ消防士はホースを持ちて走りゆきたり

円柱の裏より来たる人かとも見つつ弓なりの坂登りゆく

笹の葉のさやぎの上に直ぐに立ち樹々傾ぐあり 夕雲淡し

みづからの音読の声低くなるを 夕ぐれ、労るやうに聴きをり

これらの歌を読めば直ぐにわかるように、宮脇さんの短歌は南信の育ちの人らしい透明感のある抒情的な作風であることがよくわかります。

季節のうつろいに対する反応、家族との交流のぬくもり、旅での発見や共感など、いずれも緻密でしなやかで明るい力強さを秘めています。歌集を読まれた皆さんから大きな支持を得られること請け合いです。

歌集の刊行を機にさらなるご発展を心から祈念申し上げます。ながらはなむけの言葉とします。

平成二十七年五月吉日

松 坂 弘

仮想の火 目次

はしがき

松坂 弘

二夏の過ぐ

一五

噴水

一八

秋から冬へ

二〇

喪の草履

二三

石の象

二五

実をふりこぼす

二六

蠟の灯ゆらぎ

三〇

オフェリアの髪

三三

冬日の中に

三五

まなこ開けり

三七

花祭

傷もかくまひ

月蝕

伝言のやうに

結球

音とも紛ふ

仮想の火

つつみて香れる

人の十指に

何も残さず

陶の薔薇

孔雀椿

黒のパラソル

拳をひらく

蒸気時計

三元

四元

五元

六元

七元

八元

九元

十元

十一元

十二元

十三元

十四元

十五元

十六元

十七元

五感踊らせ

無数の中より

みなとみらい

春の靴

記念樹の梅

この世の夏

朱色に染むる

冬のさくら

咀嚼の音

市場と野鳥公園

延命の器具

一杓の水

疏水をめぐる

瘤もつ樹木

不思議をいただき

七六

七六

八二

八三

八五

八六

八七

八八

九四

九七

九九

一〇一

一〇三

一〇六

一〇八